

生徒と共に学校のあり方や将来を議論。 スクール・ポリシー策定の過程から学校を活性化

岐阜北高校（岐阜・県立）

生徒の本音を聞き、生徒と共に学校のあり方を考える

毎年国公立大学に多数の合格者を出す岐阜北高校。しかし、生徒たちが偏差値を基準に進路選択することが多く、主体的に自分のやりたいことを検討できていないことに先生たちが課題感を感じ始めていた。そこで、学校が育成したい具体的な生徒像を、教職員、生徒の共通認識として形成することで課題を解決しようと考えた。

時を同じくして、2019年度に県の「地方共創フラッグシップハイスクール」の指定を受け、探究的な学びを始めることになった。カリキュラムのブラッシュアップをはかるためにも、当時の校長とカリキュラム開発事業部の先生たちは、育てたい人物像を明確化する「スクール・ポリシー」の作成を目指し、生徒も参加する「北高活性化プロジェクト」を発足。文部科学省からスクール・ポリシー（以下SP。岐阜北高校固有の「スクール・ポリシー」は括弧付きで表記）策定の方針が出る前に、同校が独自で進めたプロジェクトだ。

「生徒と教職員の協働にした目的は、

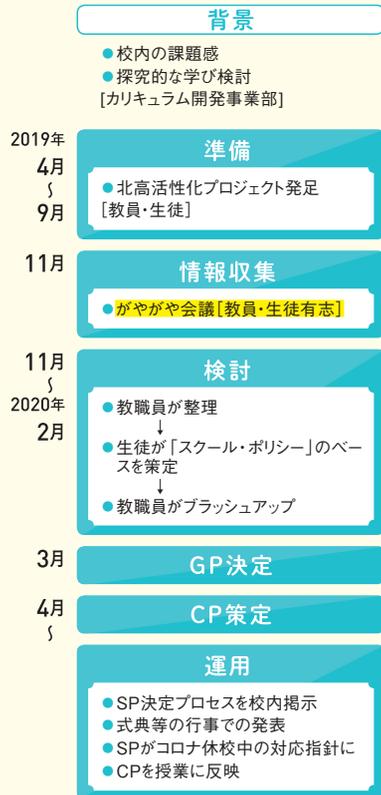
生徒たちの自発性を促し、学校を活性化させることです。我々教員には、学校に対する生徒の本当の気持ちを聞けないのではという思いがあったからです」（カリキュラム開発事業部 高木一輝先生）

生徒と教職員が同じ場で課題を考える「がやがや会議」

プロジェクトチームとして、教職員はカリキュラム開発事業部を中心に各分掌から1名ずつ、生徒は生徒会メンバーを中心に結成。プロジェクトのゴールは2019年度内に「スクール・ポリシー」として目指す生徒像を明文化することとした。

進め方の計画を立てたうえで最初に行われたのが、2019年11月の「がやがや会議」だ。教職員60名と生徒の有志22名が集い、教職員と生徒混合の小グループに分かれて学校の良いところ、課題に思うところを1時間にわたって率直に語り合った。KJ法で意見を付箋に書き出し、各グループの模造紙には「先生たちが面白い」「授業の工夫をしている」「生徒が受け身」「テストが多い」など、付箋がびっしり貼られていった。

岐阜北高校の スクール・ポリシーの策定プロセス



「がやがや会議」で出たキーワードを教職員チームが整理し、それを基に、まずは生徒チームで案を作成していった。プロジェクトの進行は各フロアに設置されている掲示板代わりのモニターで常時情報共有。プロジェクトメンバー以外の全生徒や教職員にも、活動内容が伝わる工夫をしていた。

生徒の「スクール・ポリシー」案を、教職員がブラッシュアップ

「スクールポリシー」案として生徒たちからは、「三自政策（自主、自立、自発）」や「三交政策（生徒のつながり、生徒と先生とのつながり、先生とのつながり）」な

どが出てきた。みんなとつながりながら、自分たちで決めたい、行動したいという生徒たちの思いがあふれていた。

生徒案の言葉と受けを受けて、教職員チームでブラッシュアップが始まった。そこで出てきた言葉が「荒野をひらく探検人」だ。

「がやがや会議を経て感じた課題は、生徒たちが与えられる環境に慣れすぎていて、教員も与えすぎていることでした。「荒野」には、正解がひとつでない未知のことに自分たちでチャレンジしてほしいという気持ちだが、「探検人」は、そうした荒野に向かっていく生徒たちに、自分なりの答えを探してほ



「スクール・ポリシー」の策定に関わることは期待しなかった



ナズィファ・ファウズィさん
2020年卒業生・元生徒会長

2年生のときに北高活性化プロジェクトに参加しました。もともと生徒会活動は活発でしたが、生徒が主体性を発揮できるのは文化祭や体育祭などのイベントのみ。生徒会のなかでは「もっといろんなことに関わりたいよね」といつも話していて、校則のことなど学校運営に関わってみたいと思いつつ、先生たちとは授業以外で話す機会はありませんでした。

だから、先生たちから「がやがや会議」をもちかけられたときは期待しなかったです。「やっと自分たちの声を学校に反映させられる!」と思いました。会議後に「スクール・ポリシー」をつくっていく過程も、私たち生徒が提案した案がどんな形になっていくのか、ワクワクしながら見ていました。先生たちが学校を変えるために考えてくれていることが嬉しかったです。

私が学校の運営に関わりたかったのは、学校や先生たちからたくさんものを与えられていると感じながらも、それが当たり前で疑問をもってこなかったからです。その状態で社会に出たときに自分でやっていけるのか不安もありました。だから高校生のうちに自分たち主導でものを決めたり行動してみたかった。そういう気持ちを先生方に知ってもらえる場がこのプロジェクトだったのです。

策定後も「荒野をひらく探究人」を使命感として意識したわけではありませんが、「スクール・ポリシー」策定に参加したことで、自由になれた気がします。実際にその直後に、生徒会で校則を変える取組ができました。私たちができたことは一部でしたが、むしろ先輩たちがもっと校則について活発に議論していて、私たちのころよりも主体性が増しているように感じています。



ナズィファさんの後輩たちの代では「制服について考える週間」を実施するなど、校則により踏み込んだ取組を行っている。



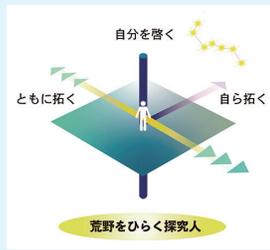
(左から)特別活動部長 山田雄太先生、校長 鈴木 健先生、カリキュラム開発事業部 高木一輝先生



教職員と生徒で学校のあり方を語り合った「がやがや会議」。自校の良い点、課題などが模造紙にびっしりと埋まっていた。

● 岐阜北高校のGP

校訓の「変わらぬ色の三つ柏。若き生命。高き志操。ペン象の英知をもちて」と矛盾がないことを確認してつくられた、「スクール・ポリシー」のイメージ図。同校で「高き志操」の象徴としている北斗七星を配したのは鈴木校長のこだわり。



ダウンロード可

「荒野をひらく探究人」を策定した直後にコロナ禍に見舞われ、「まさに荒野を切り拓いて来た」と先生たちは語る。

「授業アンケート(※)で、SPと関連した達成度を測り、授業改善に結びつけてもらう取組もしています。例えば『自ら拓く』に関連して、『本時の授業で、主体的に授業に取り組むことができたか』と尋ねるなどです。理想は意識しなくても自然にSPに則った授業や学校活動になっていくことです(高木先生)

SPがカリキュラムだけでなく、生徒指導を含めた学校活動全体の道標となっている岐阜北高校。学校の活性化は確実に進んでいるようだ。

「当時、初めてオンライン授業などをするときに、先生たちのよりどころとなったのがSPでした。また、生徒たちは秋の文化祭を実現しようと、一斉休業中でも自分たちでガイドラインをつくるなど、主体性に磨きがかかったと感じました(山田先生)」

また、2021年度には生徒中心の「制服検討委員会」という校長の諮問機関をつくり、生徒たちが多様な観点から制服のあり方について検討。校則を変える仕組みを見える化していった。「筋道を通して練り上げた意見は学校に取り上げてもらえるということを生徒たちが体感しました。学校側は生徒の発言権、決定権を認める。これが主権者教育で、校則は生きた教材となりました(高木先生)」

「授業アンケート(※)で、SPと関連した達成度を測り、授業改善に結びつけてもらう取組もしています。例えば『自ら拓く』に関連して、『本時の授業で、主体的に授業に取り組むことができたか』と尋ねるなどです。理想は意識しなくても自然にSPに則った授業や学校活動になっていくことです(高木先生)」

「授業アンケート(※)で、SPと関連した達成度を測り、授業改善に結びつけてもらう取組もしています。例えば『自ら拓く』に関連して、『本時の授業で、主体的に授業に取り組むことができたか』と尋ねるなどです。理想は意識しなくても自然にSPに則った授業や学校活動になっていくことです(高木先生)」

また、2021年度には生徒中心の「制服検討委員会」という校長の諮問機関をつくり、生徒たちが多様な観点から制服のあり方について検討。校則を変える仕組みを見える化していった。「筋道を通して練り上げた意見は学校に取り上げてもらえるということを生徒たちが体感しました。学校側は生徒の発言権、決定権を認める。これが主権者教育で、校則は生きた教材となりました(高木先生)」

「授業アンケート(※)で、SPと関連した達成度を測り、授業改善に結びつけてもらう取組もしています。例えば『自ら拓く』に関連して、『本時の授業で、主体的に授業に取り組むことができたか』と尋ねるなどです。理想は意識しなくても自然にSPに則った授業や学校活動になっていくことです(高木先生)」

また、2021年度には生徒中心の「制服検討委員会」という校長の諮問機関をつくり、生徒たちが多様な観点から制服のあり方について検討。校則を変える仕組みを見える化していった。「筋道を通して練り上げた意見は学校に取り上げてもらえるということを生徒たちが体感しました。学校側は生徒の発言権、決定権を認める。これが主権者教育で、校則は生きた教材となりました(高木先生)」

また、2021年度には生徒中心の「制服検討委員会」という校長の諮問機関をつくり、生徒たちが多様な観点から制服のあり方について検討。校則を変える仕組みを見える化していった。「筋道を通して練り上げた意見は学校に取り上げてもらえるということを生徒たちが体感しました。学校側は生徒の発言権、決定権を認める。これが主権者教育で、校則は生きた教材となりました(高木先生)」

また、2021年度には生徒中心の「制服検討委員会」という校長の諮問機関をつくり、生徒たちが多様な観点から制服のあり方について検討。校則を変える仕組みを見える化していった。「筋道を通して練り上げた意見は学校に取り上げてもらえるということを生徒たちが体感しました。学校側は生徒の発言権、決定権を認める。これが主権者教育で、校則は生きた教材となりました(高木先生)」